



平治内治卷上

ひうめよたきんみきと三皇五帝の國を治めに
翁八えれ民をよほろみまやまきうれて物をみて
友不仕事をかかりみて禄をうくか故也
君臣をえらんて友をさけんとのきをもうる
て、歛を多くふ時々仕様くもうし成せせむ
ふ事一勞せす」して化すといつりかりゆく
舟航乃より酒をよそふかくい櫓櫟の切
をうり鴻鷗れけるを志れど必羽翫乃用ア
よぶ帝王の事をたゞじかあくの匡弼乃たすけ
アよ教と云ふことに力匡弼を必忠キをまつね



はもんとうら時も天下をのほりおきゆうと
召めたりソアヘソリソアにて王者
の人臣を盡すソ和漢あ朝國一キニモニルとも
てさじとく文とりてき方様のまほりとをた
すけ度をもていに夷比亂をあめむ天下をたも
ちみ古吸治しりもくりとえ代左小ノノ度を
六ノノモと召めだりたとつも人のゆきほのす
みあくソリと川をしけてきソムヒソア端
みてりきふ時四海風波乃たうれきハ衰民庶
ノうきへキそれ境事よ及ひてい人おこてぬ
城と夢めし民だけくして豊公をナモさび

く勇をす人志を禮賓せらうをきき勇士あり
さきハ唐の太宗又宣帝を聲せやきて功名ノ
落ひ血とあく刃をきと呪て烈士をみてソクス
ムハ恩のためよげん人命を義ふよてうろづり
されハも須あらさんことをりこまうす只見とい
たそんま一介のこ思へりうりどるん所ノ
手をわろーーこれとくくうくもほこもんよ
志とやとこせハ人みまきーきり又禮賓比徳ハ
明の蠶賦より業をとどタノアのくうひせひを
を市ねつきやふその縉襖ノもくとをりて右裏
のきのかくよあう事とふくと其糾邪乃志

をり、ひて扁菴乃わきへんこくそつじとをう
らむゆきみよ熱志のうひせ用持す、きもけ
事、うりめくよ近東燈中幼き道中え持大丈志
清門縁若原ね良伝教ゆせりふんをきへんの抱
天深鬼屋根子人ぬ萬裏中國ぬる際乃ハ代役瀧
橋慶ニ佐李隣り飯こ併縁三佐仲隣り子ナリ志
くまをえとあすぎふとゆくに持もく藝
もう、うて朝見小のこ下にて昇進よりり
モ又犯ハ法幽乃更服をのこ転て年だけよも
り、ふしてのち正内ク小近三佐までじと
里し、うあきそ近湯日暮人取后まく司寧お中

ね湯府警接也遙役別當あれをわづク二三ヶ
年のうひ、アヘの下でトトセサフテ申納
云志清門縁アリヨキモリ一れ人の家婿ヨリ、
うかやうか昇進ハ志行ふア凡人よをひてハ
いまうく乃レバ比份をきくに又友達の男
よもくすま禄もな経公乃まくやくの色分
す事アリト、もれ不足して家よたえくに
た居たるアリ金をうけとをもそをね受けよき
ふまひをうそもあまうきいシラ人間をふくさ
ふもあえだり怨槐の鬼をもたうきほく葉

乃思不口うからうきうをひがゆくへて伝あと
りふものわり山井三佐永就は八代後胤也す
多羅りまこと鳥羽院は家臣士基人吉通り又は儒
院をうけて儒業成らんすとりをも法尼道
寺にて法事ふくらうりて九流百家ノリ
多羅世姫双乃宏文博覧うりは白河上室比川乳
母紀伊二佐に支つろそりよて保えく年より
これうと天子大小事頼人のまゝよどりお
こよてぬうらじを洗毛もとまうらをねあ
せ久の例うまうせくち内小社縁ふまくき理也
を勧使可望ひまくよかくそん人のう

ものこれらは世珍淳素小ゆ——君と竟昇より
しそる也承天暦乃ニ約三十も義懷性威
ク三年ふとあえだり大内をひそしく説きせら
きこまくかく食飲危し構圖意廢して牛る
くまき難薨のゆ——うりそり——を一年
のうち小き是志て邊をゆきうか櫻宣鑑つる
大極至を樂院法司八省太学察約所アリシ
までもみ乃携くも比アト大度乃かゆく成風れ
功ト一役を以して不日アトみまくわくとも民の
肩からひきうくに乃けりアリありたり内
裏すまよの筋久しをぬうじをたすく詔文書

法のあうひおまよされてあひもよがほれま乃
儀武者とそちもあ率一札はゆうきうあく
さんりの保元二年八月十一日主上内侍とす
へらせ候ひて臣子のこやよゆほりやうせ候
里ニ源院毛なりあくきを信あり控候え御城を
ふみひてどふ鳥もゆう草木をもひきもくりす
里又信教に内虎毛とれりやめつゝめよして肩
とくねうん毛る一ちひぬ雄を必あくうふ
うひうつうへりううう天麿ク二人ノハムヨウリ
うもうりきし其中アーハくしてことよふきて不
候乃ナツヤモキリ信教ハ信教とみて御候ふも
ば有天下とをあやふめ闇家をもみくらん正う
仁よとせりひきれきりうすもしてうすもく
やと男へともあ時無双ノ虎毛うふうん乃公
もしまことされもうらじけて「わりすへき家
をうへはゐてあ」とたもらひ者だり信教も
又何來一とんのまくうり「い入乃されおこ
もんて候とむももんのうきうり「一とゆこめく」
てうれハリうきうりうりうりうりうりうりう
じうて上宣伝うりけつハ信教う大ねをのうえ
アハレふうみうれちもも主代清花の家アアア

さきとを時よりてよき事もありまつた
子は人をもとめられと信ひますを
はせの中りよひさてとあけつゝきてすまうる
候狀をうたぬよりはたきうをもとをうけ
はいさむん君の所まほりしとおれりゆくと
えて先とく叙佐除周アヒクニリて至ぬき
きつゝ天のまく小さむき下人のアヒクニリがえり
て世の乱あくアヒクナリモ例漢家や朝アヒク繫々
み里ふまたやや向右丸大納言家通にと向河院
あね小まさんとだ用 無アヒクちりあらそも寛治
ノ聖主清ゆされあらき故中津門若中納言
家成以成舊院大納言アヒクなきもやと信られた
ウとぞ法太支は大まさんアヒク事ハ既て
久しをひ中納言ふりこまひた小色分アヒクは因
おと法マリシメナリときしかもたやアヒクと
まわぬせめて乃清志よやアヒクめの勅書
乃アヒクふ中津門若大納言へとあそをさ
きだりまくろをね見つて識あきれあらせアヒク
みもねもきつろぬ因アヒクは志のやうとくに
うとて老乃歴とくひく様きくとく承りは
大まさんな代にて君も枕ししおアヒクめノ一
もゆううセアヒクとぞいさあヤーク

もんや近傍大寺おや三ふか列まれともたぬ
とすをさうの臣のこあり執柄の息莫ヤ乃實そび
歛を先途とほ信教をくわすとりて大ねをけり
ミハふおこうときをもて猿遊れ臣とすり天の
たあふりりやまはりんとてうてうふひん
かたむめさきてうさといさめヤタれとえ
かふりとたす——鷹——うな氣をとす——伝西
あまうり北か狩あきよ唐乃春嶺山うだもまう南
を猿よつきてぬきぬ三卷をばりて院へあす
せうれせ君きみ抜けふととばくめ——うな清
事えく天氣地よことうり伝教彌ハ通恩入
内うさんくよアキラヒとをかまきてやく
うぬ」とふねりひけきもつて不勞を考
しわ仕とせず伏見の源中納言仲仲ハ成あひ
かくらくは生ふ」こりりぬくる下のりもセ
ひき早足ちりりりとひよ小民藝とそけいこ
子鬼新作近候初ハ大威清盛乃蟹ハかトてちう
所より平家乃武城城もてかきをときんとた
大猪ハ一簇ハ多鰐景とつかりうるもあ
しきまほよも同させ」と思のとくまうたる

頭髮ねじて保えに忍たれぬ後平家うりやうえ
抑とてやどりくに存すのちめどゆえこれ近侍
きつて承んあらよ志たうかより一きう者よきん
さるもの度かに信教くして作へい幽もも店をも
更に友か階政も下さまんよ天氣のもすゑゆく
しとひだますやうよゆきよしけうれい衆
男ふとて大夢うりりうるうらは大幸ともゆく
一方ハウコメヤシルうをひけふゝのくす
らば當帝代いか厭新大納言達宗たとわくらひ
中止門あ中幼き家成つ乃三男越後守　ぬ威
親ね臣々君れほきときよき者ありとくとくひ

湊乳人の別當煌方をもよのまれきり中止くは
おあそ母方の叔父きりあ小弓尾強かぬ信
後故聲よる一時更かくう聲うれきつゝや
アリもとため免くろしてもまとうかくもれ
けふりと小平治え年十二月四日大歎清盛高致
ありとて嫡子吉宗の佑主感わくして然壁衆説
乃ことわり其れま死きて信教ゆきゆをゆ承き
伝あい紀伊二位乃丈うりうして天下大小を
を公のまくすりやむこひ子ともとて友か階
やうるまくうりやうあく人信教う方さぬ乃度
どく穴をもあすり下まく縦傍云極乃ひりきの

なりはへをくとて天下よあてを闇もかくふき
世をみとれへまゝまゝものりとひま里畠をこ
いに用ひりたれともさせふはりてをあけき
をほほよちめもありひとよは道始終をりく
あらん大威儀盛もうきうえんとすりて源良の
人じとせあめりんとよらすとじそめりきよ
をやうふちうもふつきわをくくこきそめり
アラキキラカ六源主よると七代弓箭の藝をりて
今う一叛逆のじもくとせ代弓箭の藝をりて
ほくへて函能をありうけはもうふりちぬふ
保元は内緊乃寳太やくの歎とかりて親れみる

梶せきき己上義朝一人アマリキリ作へも
清盛之内、ことうじくひひらんきりいわよ
りくくあひ筋もねきハあまめちたとろくへ
きりてひもひともやアアタのじ経はうへ
を便宜ひもくあ家乃深沈也とあらひアト
アシテリクのほくり乃太刀一腰三ノトロ
アリ景物縫ぬ縫ねくかられきくよふろきくろ
をさうすうるニモ縫繕をひて引そだり來
陰の事されそねぬわうわけアせているをク

うせんりあ立ふるりと乃大事ハシモモラ
あらの清るゆくはは詔諭とりそりうきつ清御
うりともあどりをすてはいき合戦をせいは
ハヨリはもどりことせもてすとりへうを小と
もて大アトてきせずをヤシテ教光墓李亥お
とをかくれはへそえは是ホトコノイテ源氏
ノも内くアむ林をか義里はとヤテおうれられ
ハ信教に月あら日はやうらをうきうら度具
されそ御ノミテスロ禮五十度遅行不叶うも
されそり信教やうそひ人ヒトヨヒてうのじへ
きうり宣ツモ一つの中ノ大御正ニ小ちこつひ

あるう人もさうアわざりんとてかゆりされ
がんき小うちろんて日九月八未子刻ノミリよ
伝教は左る駿巣野を大ぬくして其稼五百餘疋
院れは所三余五へキソレセは内門こをうち
けこめ右邊の壁家ありうるうろひいへキ
ミをううかりけりア伝教う禮よとて信教う
クシナタあアト東闕北方へとまうりうき
ハヘトヤセキ上宣教ナキよ御とろウセ移ひて
キ小之の傳教とたうしりふをううりうきて
あききうせ後人ハ伏見源中助を師仲山佐車と

アリ高ひうきめあるより下さきままで
や火代馬トシテアシカソヤキツ上置あもて
ニ渋車アリめさあまとほいをうとの上西門院
もひこうぬ不よヨコラセスヒキツ同西車小
アモリキ信教御先泰光墓李寔等恭歎左右
アシテうちうこみてお内へいきあせ一品渋書
アヌ押へあなるやうて佑凌或ア大史宣威固防
判友季安近主作にて君と守護志あつまても
け宣威ハ保え乃乱乃時も贊政院のに和すの寛
遍法勢り坊アリ後うそ活ハシズち藩一章
て贊列ヘ活配流アリアラミエ鳥羽までありし

吉キリリリリリリ有ニヤ二代ノ君城トアリア
ラヒランと人ハヤアハミニ象の五三アムア色
ナロウナリ門ヒギイ共ヒモクシメアロニ處
アト穴をわけだり爐火をようちて暴風煙草を
カク云彌石上人つや林ノ母房うちアリアリア
セマリアロセタアト金寺トソウ色青竹火はやけ多
アナリ矢よあたゞしシトウ色青竹火はやけ多
アシテこれ火をちくかつたろいさせよアモト
ヤシトシヒ入されうれもあらくの事アモト
火アリ水小お下れ中アリハトモよおきままで

見し見えぬよとやけされにうりきと称
うつを食のそけときをよふまうてられて原
郷地アリカとモアミタレハウラウ者アリたれ
ウロハキツの山原の奥より中古君妃宗女の身を
ウロヤヒトアドリアホバ仙洞ノ田禄少は月
に玄言乃令をモモシテ流ゆタレガ勝利射
太に家仲右衛門射平康太安ヒ義朝トモセキタ
くツヒキウクはるアリテアキテケレモ家仲康
九り領を辞乃ミシフツルわき大内ヘモセアリ
猪突門ヨリアキテおめきさけハラ外ハ志
りシテバソシトテテ御内ノノ刻ム信アリ

高木姉小路あ同院金すよせて火伏ケタれ
もゆゑもへのあもてくぬよりひあけりをモ信
あクモトトノヘテヤアリミラシニテモ不く
乃ちのときりセキモ保え乃乱己はハ理世安
樂小一アテ教鄙戸アリセム達教娛甚萬一アテ上
下のみをアリアリ少少災の多徳は民食無不く
ウロヒアリハナシソラキリわく世中ういニ三
年も治中守吏志野アリテ甲冑をアロヒラ
アミ常正く者もアリアリセムと極くねアリ
ハ矣とも京向河のみちみて里ゆくすゑいゆ

とあけかぬ人もすりきりかゆく入る
伝あり子息立人國友せし難嫡子新寧わ後恩以
男橘慶中 將成恩達右中弁更恩義濃かぬ長恩
信濃ち雅恩あり上つて花山院大納言也雅恩子
ハ差人右中弁成教とそぞく——うりれくア
左政大臣左大臣内大臣以下云々奉肉志行ひ
しらる食後あて伝あり子をだらびらくア
ちりまの中ね成恩ハ左宰大臣盛の算されハ
リや食たすかれとて六りくをあちられそろ
きと並ぶとて内裏よりあきあきアメされ
されさ力及りてかられきり博士判友坂上通成
ゆきしりい成恩がうけ御く内裏へありされ
あねるまみゆめわりとて通威アリ於けをかの權
右中弁更恩ハリとちり切法中小吏てりとり
アラのひだりきりと家判友伝院うちひり
して別あ小ドナリトヒキも信院はあにけ
られきりやうて隊目切こみはく伝教にハもと
うとのそとをうけだり——左大臣太ねとク
禄たりきる駆教ねハ橘慶開を治てうり候の
アミヨウリ佐治承ア太史を信院守ア うりあ
田益人大丈源於範持津也ようり源通經ハ左清
門尉ようり康忠ハ右清の尉小みよ足立四多を

墓ハ右モ先ヨヌアヌミ籠田次シ而テ改シ後カ考ス傍シ翁ト
うりて改シ家ト改シ名モ今度乃ハ合ハ致アトアうりめち
キハ上シ總シ國ト移シ人ミトト宣ヒきミりあクヨニ義明
ク嬌子鍾食シ源シ太シ家シ平シ母シおの祖シ义シ云シ浦シ久シと
とシわリきリりカよコもく事シアリとモくテ
嚴シ伐シトシせ乃かリきリくク今シの除月シよモり
あフ伝シ教シ不シきアトシろウんテ義シ平シけシ除シ月シ小
まミ里シよシトシいシのアれ大シ國シクシ小シ國シウシ友シ加
階シ之シ思シハシトシそシむヘシシかシざシんモまシ
トシくシうシまシつシきシとシ並シるシ義シ平シヤシトシ保シえシに
伯シ文シ無シハシ多シるシ約シをシ守シ活シるシのシ出シ来シトシ義シ人シ
みシよシきシタシれシをシきシくシうシちシもシくシみシとシ擇シ
中シ考シりシいシことシもシりシつシるシ義シ平シトシ勢シ主シ給シ里シノシ
安シアシ聖シトシリシひシむシのシ清シ盛シトシ向シ城シまシうシんシ
ちシ小シ津シ衣シもシりシすシつシつシうシらシ金シとシだシすシらシ
よりシこシりシてシ一シ交シよシ引シるシトシりシいシほシんシすシらシ
むシとシ思シもシくシ山シ林シをシよシみシけシこシりシいシほシんシすシらシ
あシうシうシ逃シげシめシくシうシもシ重シてシうシいシとシもシ獄シ門シ
アシ急シてシ其シ役シ伝シ而シ成シりシやシ世シとシあシのシまシわシて
もシとシ大シ國シ小シ國シもシ友シをシ加シ階シもシすシるシかシ見シ
えシうシ幸シとシきシよシじシてシうシりシてシうシ小シうシちシは
へシいたシ義シ平シをシ東シ國シそシつシしシてシつシしシ者シもシアシリシよシ

行けうれて作へそりと乃西源太もそひもんと
うやきの伝教義平ウト状意儀りりそう人安部
豈まるてゐれ是近かリテゆうせんうわくへ
られて中よろこめうさん正うすうりとやあら
つまと立ひなれもくまほ業よきかかれちり
ひとへようん力つききくゆくはま太政
大臣伊通云をあらハ左大將トセナリ一キノト
文子優長小して清前とても嘗小手りと
をナシキナレハ易も良とセナリヨクセ
終ひ済わうのも良ともナリキリ内裏よそ
兵士せゑりアーハラキリモタモ思ひの
いとく友か階をうつ人城ぬべくちらリ一にふ
ももりかく友佐をうるさんやは三條系の升ニモ
あく人とこうしたれよと其升ゆけ友とあされ
ねちとヨリこれまうま箱よ通窓入るとこうひ
られられましんふをさうアリもくらきり
は信乃とヤモ南家博士長の守る階後り於ヌ
きり太業もとけモ儒友小モ入られモ宣代ア
アラサツのありとて弁友ももあく日向も通窓
さて紳とゆくはゆ人ゆくゆくじうりまきうら
お家ちけふゆつも古へ来らんとひんをう
きまう小贋水小面像をだきりす乃前歎力茶ふ

ゆてむりくうりとりよ函ねあうをくろき
思ひけつらる有死あうふまで然壁へありきり
切アヨミの活まへてわんアレおひだり函
窓をみてわしていもくは邊を法乃の友人うみ
但可首勅の記アカケて病令と草上ニテ
すとリふわのあつもりう小とりひて一ノア
わしきりくかくすゑちあううと
幸もたらモモキモハ函窓をて写ようと
あけきけふううれとせりふりてうひめりてき
とツふりさかぬとてや乃つきじすもくそれ
もモ旬アアマリハリアムントヨリふさて
ふ、下ぬとてはあへまりりお家乃志はり日向
乃へるとよもまんハ無トアリうきてあアノ拟不
えいか効く試沙ゆアリナリトヤトヤトヤリ
れもか納言も一人人もなりきとてさうき
ちりぢりきぬ友きりいやくあらんと取らせら
ききんをやうしくアリヤて活ゆるよき活巻里
やうてお家アリてか効く入乃伝あくそんひり
ふ子せ或中かぬアリソニモ活巻七弁よりあひ
もせてゆくアリトヨリスミソアヒ
神アリ身をう色ともあれ今次登へのよ草アリ
をきう林あもゆのたのひきふれかうひ

詔引並書きたく日のあつてあつまれたまを西
はまつもまろ隕乃あくとりようこともりす
ふ伝あぬ日れ午刻す白虹日とつるぬくと云
天多代みてと東海所へおうちりをとすえ
里だりきりよやけやうやいまんとて院れ所へ
ありべねをせりゆ治甚まで子をみよ清流小
祖ひきと里うなを興とこまよあらせんも無
貴されいあら女房ノ子ぬをア城きくまうり
リてよきり翁不ふか色り紀伊二佐よつゝ事
ゆりすともみもあらせ後人信あいわりよひ孫
ええさくらとへりありとりひきまほ尼云
風トうちりうとるけめうもどそやうく
らへどりては四人あひくね着らきまへつる月
ものるようちのりてとねり成はとめく
ぬひかへぬちうれキラク守治路アカアリ田
雲山乃トロ志アシの峯をまきうちく
けりよ又天多わり木星寄余めより大伯經
典不侵とき忠臣君よめよりあり太伯經
多うり仰あたきアリをとろきかより天文圖源
をきもあじりをまほ内くらまとしんよ
れアリけよきそのよもくよもじにじと

りよえりありあき暑をへふ時ハ臣弱を切ニふと
まうい君よそくうつてりうりうりうにほたにて暑よ
もくかくせ行ふをししたほまくまくかはくと
云うたうらくい我うりへしと思ひそわくあ
十日のあした太湯門尉成京とりふぬを廻して
教乃りくはゆ事たりあるみてノ人れとてす
けくもと成京るアリうり家てもせのれくよ小
幡うづけりて入内乃食人矣はとりよ志後不
久りて段津門家へときくくさび」と中
さんとてましときくよゆまあふあうくの室
をとこ里婦小説の伎窟不え焼りくまれいぬ是
ハ右邊門徒反たる駆逐をかくらひへ乃歎比活
一門をやろやう活もんとのもくりととせうと
承里く其ト一枝は河あらびんとあらひ金集
里はとやせば下落ふたり一刃あくせでるあ
うりうりんと男へきぬいよくありたり春日山の
奥深く乃ちものうりとをへて成京ハ京への
やありうりゆく田原乃たくアカ色うり入内ふけ
室をアセキと書くうつ伝ぬりみとらじ事小
事もたうもととおもえほるう太昌君よからう
まうとあまたをつと金をうりうて清恩を報し
まうんみに従いきのうよもん詔を私乃清名と

とあへまうせんとまもつも其用をせよとて宣
示ゆくやりに方々板をみてあへ入るを
それよりに人のけりとよりまりて安期乃は恩
みはほろとたゞもとをのくやせと左房
門尉仰光ハあ光右衆の尉成京もあ京長者左房
清々あ清源理全清実ハあ実とそばけられけり
モ松山をきりと竹ノよとすとすて入るへくら
トアてくりとくらをくしてやううじ四人
のぬらう力ぬ人里でかけきられともりあへ
きことううれをくく船へうへりきり食人
或日同く船をうちうぬねんがふるうり
御停二佐小三せまらんとてじめきる城にて
うへふりとすりおまお見光泰五十條院にて信
あうせく湯をくわひの東ふり木惣山ゆくゆき
あふると食人もみすりなれやわふせてらひけ
ふよくめをあくすとりひきれともほの背
ありのまくふうやきう則ば男をそきよたてく
ひかどよわくらくく左をうくてれふわりのき
まく日もくらきいをとよひけうをくひを
ぬくうかくらきうかえ前日光泰伝教マスナゲ
ゆと下り月十四日小舟送本と同車して

光泰の肩不祚樂思へりひうて、復に実接を必
定されをやうてあくゆ日大略と後しし獄門と
轟らるべとそくめうれきれを京中乃上下
河原ノ市をうて見ぬ可信教義も車体え
く是とうう十五日れキ乃刻乃事ううよもれ
うち天俄とれて星あだり乞と不思後とりふ
ううよひくひ伝教義朝乃車北前代もとぶ時
あうううそとせうとせりまうる人みよう今
うとをあらやうんすたううくうそい
ひまうね歎よあうよまた勅立下さわにして
須川城に不けらうくえ承世ノ高業と云ふ
ウメちわう保えよハえく久しき元龜とやむこ
あひしむくいとく人、ヤキムテて紀伊二佐
の奥ひあきりは僧老因宣乃移り源ウリ
入乃永ハキム移りぬ僧俗ハみせ十二人より
らぬくあうれて延生もいまとまもせね
あうせけう裏もす一翁うれさせおひて月月乃
ひつりえんえんりーーとくは内覧せすよろ引そ
せなれども信教の方へとりりうとうまん
といふふれをいたるゆほのうきうとうとうう
されきりの紀伊二佐とやハ紀伊守義えりま
こるる駆範幽りじすあかりハハナニ三佐

不叔しやうて迄ニ佐して 一
キテ信あり事むとよりてアミナキ中アリ
唐僧來て生まの觀るアリとてぬふらまアリ
ミユルイ久安二年乃そのあら鳥羽御立法會
熊登山ヨ法事場アリアリ 其は那智山ヨ唐僧
アリ名シハ淡滿御門アリアリ 其は那智山ヨ唐僧
け音とすてすして生まハ觀るをあうミモラん
とりふ死滅ナアリ天小あふモテ一子目アリ
内行榜をあはス日ヨ滿トキモ東るんちせ方
乃觀者をねうまんと思ちく日域ヨゆきて那を
ト云ふアリキモヒケトイフ天ハ示現をアリ
アリ後滿の車籠城とけて彼山ふ衆説せうえり
は宣ひアリきあリヤテ唐僧をめぐまきまほ
洪前へまく和尚ムク礼モ唐僧されモ禮成モ
アロアメムアリアリモ乃さえけるレタキム
アリ伝來庭アリヒキムリ緑かばは複陳津
鶴ヨテモトモろくとくとくス唐僧のいもくさに
アリス弘摶被戒役除大精ヨテ來ヘスケリとこ
アリス弘摶被戒役除大精ヨテ來ヘスケリとこ
ト波モリムキトヤ思ひキん是國の事一哉アリ
ウケたり震旦の長安城ヨリ天竺乃今那大城を
そ絶巖里そと向をハ十萬枚里 一佐もアリと云

てよりおいたくよりありあら天台よりゐへまゐ
七百里向樂天乃世を乃れ志西うとことに
小善行唐僧教儀ととしんとやねりひきん扁鵲
ク内小はすかりありとりふ延命とりふ草と
へだりゆまと見る人善代まき魚牀さけあ
ひさくのふとりふ延陽ク内ゆけゆくあら
樹とりふ本あり三十年ト一交めえた小
花さ記行枝ゆほこれにきつあまときりてくふ
人解事百般日そのあらものゑ王母う桃ふく
なり長良園とほいげくう故城よりくわへさ
ふして二百里也梵王うううう三百家ノハる
胸の塔ありうの塔乃りく小は摩訥鼻窟花ぬり
まんあやトやけに發乃そんけひけたり釋迦
輪船似ひえりとすてうとむをむろし清ひ
而せ大る山やほ素素主とりふ本あを被東の象
城つゝくううぬきてうりふをえく人不老不
死乃浦城えだりあ山ゆほ殊とりふ惡わり首
すりりわくへカ賊波いうきつてうりふ仏波多
やうふ志するおりひあり長山ゆほ三室ノ院あり
枝流の水とのじ人太きつてうりかのふあまき
そと行るよ殿打くるんともよすとりうり観
虫琴と豫せうなは四方乃うううう行隠すあり

於家董伏ふまちうも天人神伏ひたり色モ唐の
太宗ハ甕の下とりふして天下をたさしり先ね
ありと一にてこそ人をまほ唐僧もつ歴より
ヨコモトムカクヒ國より來て学せらるゝとへ
もともとヨリされば國の素生あれともお遣唐使小
や後らむすらんとて天竺密延す羅刹羅百嶽と
モ一ゆて五六箇年たるふくミ一人よりあもあ
良のヲノ人づらうともすて学あれりとこ
たへタれど我生身の觀もとだりえまきと天
乃示現とくつゆりてめきまきてえきまきと天
國の觀焉たりわざ死じあくづれとて信而滅
三度礼り終へれりおねとしてきりま殺信あ
我國乃云氣をりてはをもひ紀をそうトト々れ
へ君と始め氣させて彼まの人とみまづきの
田のをあされたりまき保ええ年の春乃ころ
此處山へ法華寺山門かへて即時御立比興是
とすき名字をいたりひやうりきうト大威せよ
家の文字をうちらんとやめりひきし我山乃賊
と一同アノヤタれハ法皇先年然登て伝あ
ふトキの文字をゆうひトモリ一歩をなもや
シモテうらんとて石あるをきタれハ法華寺も

寝まつる先一乃翁の淨禪立り是もぐの申アリ
せいを鞠もうりしてをとあら物あり是ハリ
小と済るあまをどんきくとヤヒ山觀ノ方四卷
アリ乃くそろはんへ大師禪立ルとき孫よりわ
れもよきを頃上アキく孫されもすのけり
をめれつきをもありめりウレト賤ミム
也又ニスニ立可モソリヨウあれヨシヌ拂大拂
スモウリナリテやウリクヨリものあり太師
修禪立比時ほ弟もヨリキ奉トナリマセイも
きりておきふをさふ青やひ是を禪杖と云ニ
尺見フリカセ^シ成りせの事ととたらむて之見
シとふ至ぬ哉^シけてゆうたふそのあ里太師駐
候リ清む孙ツシムドキあまともてとさふ成
すふ青やひ助老と是とリ又控不^シ仰^シる
ものありを名を取ふとリトモリくも梵語理
ム忍^シすらあれ^シをば縫^シ物とリトモリ方十
九ノ年ハ下壁國守佑主の清友アリおさめらう
し護法使たり神あまかち小キ^シマセ候人
をんそいつてうあるべきあれとも或^シ御神の
清をため城院天乃^シとこ免^シ昨夜半をりて封
せらふと云々不^シ緒索人皆乃^シ会隣^シけもくよ
ありと^シやと^シ延暦^シあいた師初ノ伽藍^シ

里大筆雲ハ源草天宣乃歿歿延命院空王院ハ文
酒朱薙比内致下りは花堂ゆふ師三代ハ造經
とまゝあれ五巻山の書れ大清涼山のうちもあ
里承唐院ゆけ大師の書きうそくをありうる
もありは教とたゞまつてもかう弘仁三年ハ
もう大師九列宇祐乃實にまよくは老の真文を
うし経ひトモ大菩薩也うう教義をひ
らきもとう大師よき行修ひ志むるが泥乃
けと中度光明く極くよく八幡三不毛もおも
トもすすり天竺北たゞよう波全和尚の獨祐
難樂地獄よりうりばく人うら因縁石をば山よ
うううんあうのううう三十萬神の守護し
竹木板やれもき乃圓飯室乃五所坊乃若まつても
うらきうきうひき乃ひき乃ひあけふよよと人を
うきうきうれとニ塔の極東トシモト一々よ
ナクレハ易をく一めあくせてニ子衆院きわの
男ハを即ストタリ還宿乃くらも彌上玄高伝
あり宏光としシヤモキ半トロマハルテ四ガ
山れ万ものと里うわりきらうとも双六のさ
いの周ヨークふゝろおりうどい置一とりひ
ニクリ二片ゆりたすとすまニとりふ立六をも置
み置六とやモ乞みるううう義すうアリニ

もよりと宋三朱にとりよしと名め称ゆきと改
たうす作へつゝとやされをまほは皇きふりと
て信あとめされてはひりを経く、ときされを
そんじひり、同々を三三室とすけのを唐
の玄宗皇帝と楊貴妃と愛女をあうり、
まみ乃日りけ用りてらんう思ふ、
まみ乃日りけ用りてらんう思ふ、
まみ乃日りけ用りてらんう思ふ、
ま三村里を楊貴妃又至四川日用紙あつて我公の
とととにゆ里たらもともアノス佐よみにむ
とそうち終ふ不宣四おだりきよ天子よ信
言か、用々五佐、
よなふをりある、
よすへきせりふ小み佐が
せきいをえきい、とて三三まにひ目に朱とさく
きて、トタニれり、朱ニ朱四とよふとことぞ見く
て以へとそうあげれを詔ひみよことうりや
せうんしわそれせうるよまは凡人かうぬよや
死してはもをゆけ日記とこにけゆゆく葉を坂
く之矣麿乃廬すても東三の冥友アリツツリ
きうど人のゆめかもみとまうりわざりふ人の
ノヨウヒヒと獄門ふけらるゝと保えひかざん
かり河上村役若壁乃五三昧うりしを伝西の

や狀小より勅使來てくわり切こしを體を
じゆきもんめうれと中二年あり
て卒後元年ノリ見れとあらまくまき
クともほるふ端をさきてくひをましまき
あうたうううううれめ自乃他列はうまへきよ
うううううのせめももかやうの事めやドハキち
程ノト十月ノ曉六ノリよりうち一ノモヤる切
目乃高ノテ也付すりきよりりりうよそとどひ
後人を去れ九日ノ東三條をへ來うり入く
あみまやきりひいぬか納々へ乃比高所も焼
しらざれ作あまきや太陽門燈取たる殿をあひ
ぐらてあ家残りりりりりまうしとのもくりこ
とくしと義理作人とヤセを清盛ソリキ下向を
へき、りあままで廻りて義清をとけまもんも無
念うりいかすへきとまつて方事の佐吉盛然
登義清も現あ安徳乃清精とてしにらめ其
うへ君遂後よりこめらきさせ清筋ううりい
うてうれり武昌とて是成もくひまくひまくひ
船札としけほのくうりひうはつき魚まげ下
向をととされえれもみまけ參あそ用け
ふうれり取く歌ふひうてぬあさんもくね具
の一心もよにとほいかりもとあけき行ふ

どうのくは義定守家貞長遠代五十合をもげり
かせたりー一城よりして八十城のうちひ
五十勝乃矣其外物具とをとりりアてまる
らハソ小と並い竹初乃中ノア城において
れたりこれさすみそら五十強の弓とと里以
たせりやうて家貞を室因幡の重臣不アシヒ
草ハ體きくわう玉きもさん大ぬ軍よ後アマ
ほう志をつうあう用をもれとやせばせをあ
れま名かふらうクンし寺内鷦鷯別當湛瑞
う田道アありまくよ使とて旅人を終サ猿
鳥の湯宿權守家宣政務ともを余主行アキニ
き西宮源よりよきりあくよ源太三子多勝
もて安ア壁アトまつときこもきまば清盛は無
豫りてたせいふあふてうこまんまへう金念
なれまつ毛うに幽へもとを勢ともよやアて
役日よ放ヘソモやと並へと重盛アソ群てア
ミキミロスそれもソシムアソと幸ア延リセ
アソアソアソアソアソアソアソアソアソア
惣すと益あうヨ多勢となりるんのちも候
候のじとせあくてち夢の底アソアソアソア

あう段代の名もまさか歴けきり小とくす事
貞と見る古く筑後守六り乃は一門もさへも木
立はれりあふ不角めモラんりそりせらへと下
せけ清盛もあうるをしとてもやこ城さうて
引う色もたれ以下みよ津衣乃アヘス「もひ
をき敬れ熊聖擅現今夜の合戦」とゆへきくう
うわこそせ行へどお精して引うけくらが
ちふ和泉と紀伊國とのさうひうる思れ中山
玉あ一毛うるアマうる者人やると譽
しとて擇小毛うて奪えたりすモ西源をりにり
ひよとみる人色成アラフ不源良ノ役ゆ
わうびとて六りよりの早るうりうて六り
ハソホトヒ故人いぬ自東半もくり小かはし
まく、ゆまもほりに構度中ね石のためみて
れよこまひしと内裏よと宣言とてしきなミ
アリタクレハトト高木アセ候ひてはとヤクルモ
古事の傍しき小云ひるにとせらきりん
くうみああ然うのみて本まう人をてきひりへ
もとすとくよまやあううくておはがア勢
内きうんやとうりうれきうそと西源あり
宗部豈アまつとりよきよとひ治つ

其儀ハウツて以モハ伊勢國伴坂乃兵ノモシト
シヘイラセ後ちく清作仕ノモトモ三百余株
そまちあうせひつまとヤセモ歎比源太より
ハイテスシテヨキ見クトコソシニレバヒテヤ
シのともとてみる人色をあ代シテヨレバ紀小
とすくじりくよ和泉國大鳥乃主よつま猪小
盛極差せられ半う鹿麻毛とりふる又向鶴め
て神るよおき猪人ニ傳感一首乃有あり

ハリヒ子うよウ色里リテヨモドヒ子け里モ
シシモうてよめ不うりの神内裏カハ四十日
ムニマ食後とてモよナされきり勧酒も古湯の
燈光射れば社を信れゆうまひ色分うりとて
不衆とてナリキロウ森内一て取らんとて
トハアサワクタリ東革ひきば、ろひ荷綺の下
うたちをキトキ やクふも死後ひ乳母子のう
フノ乃古る先範能アモシムナリテ紫毛セ羅
色のあやうモノアトカアトヒヨリテ紫毛セ羅
色も人よくみぬうまよけで先教りく
まふりきとれとて活ガラフをき其かきよ
けすり難きに立人めーうて大軍隊を強て不
ふ門々をうぐく守護志キテ死すとせば紀
たううめよれをせてりり猪人之兵せも大さふ

たゞまをまうらばひしめ矢をうもめそとすま
ふ震震ゑひゝろば風てあ上をめくりて刀語
へも伝れ彌一度して其度の上薦ばら皆下よそ
にうれしう先教にあはすきの事かる人小
りふねりまよとわまひ右邊門等つきを傳
の者あれをあくゆほくすき物おどりそれも
されを左大年寧ね長方つま度寧そよにあづけよ
一せうよけふらは度寧そよにあづけよ
忍えぐと色代してあ内くとあゆみ伝れつ
のよそむすと川さ紗ふ先教つのたあゆみけぬ
方の伯父うらう人大力乃剛北人なれへことよ
むうきて召くられきり右へうてのうへうる
うけらまでやめよ下りていのをうみもき
ゆれも慈度の云つあみあきすとぞ行ふ
坐於に下きて称乃ちり引よだへふちんじく
ろひ筋うりな絆し氣きしてけふい藩府管
う一座すふと召みてはめにふ衆せざるん者を
を死罪うむとこはうをひとやうん重く衆因
にあらうり折きふことノ活をそどひけ
れよも信教ねも盡たドリ。慈度の云彌モ一云
乃医者ありこれいまとて食後の事も

翁ノとあゆくおられたり道上ようらく
うち兵せあまを忍まずてあもれば後々大聞の人
のるるれり十日よりゆくのんか仕志狂ひに
きとも太陽門簪ゑの度上小けん人一人をたぐ
まく里げるよまつゝ事よ門と
りり跡よりいそゝかも脇志たふていも忍く
路もやあれば人をたねうしてうせんせけい
りもうりうそのりうんとせいやうこりう
身つらみびく教光教伝とて源氏のふ将れい
よき其教者とくら返して光教と名のわ路へも
こきも剛りますまえうととりをえゆくこ
くくうるをすと其教伝承うちをとて伝教とば
きゆふ太陽門簪ゑのあまれく不脇病ゆけた
じあらそそりへい壁とみく天にゆとりふと
ありたううとくきととのひうみみよも
乃ひよひよ咲きり光教にゆく小ぬうすひ
路へとも急てもおうれを石上のうと見だま
へ見奈乃板たゞめよみううとてうと
だりきううあゝ漏乃障子れか服乃戸比画ア
おこううとの効用燈あれたりきうとまほをけ
て宣ひきりハムの食後とてもよ下されけるる
清一とまどを承里よとめつるまも即襟や

りん光教を死羅ノリ初ニヨモラルを人教メテ
あヨウハシム人形ウラトモイミム人みま當時のミ
歟エカリツキ人ともヨリ其内アリイ事
暮ニシヤクツリテ「ナニテモ先日右房門邊ウ車
虎アホシカガム入カクシヒ突撃のためヨ神
樂墨ヘヒリズレサム事リモソリ小リて乃かち
アセクスガムアマヒシミ近傍大ぬ檢査邊伎
別苗ハ地ナリ「トウラ宣歎アリモ歎ヨ者アラ
ラ人の車乃アリヨモ活ム事トゼンモイマ
サヌリハあ時も大きアシモ厚アリモクンヘ
須寔捨ハ暮限便アリと志ヘドモおあうれハ天
氣アリヒトモとて赤面セクキモチアキ教彌
ニ称てアヒツク小勅立されハトモイリテウ存
モシモ称ト一殿中ニシテ多ハキヨリク麿祖勅
諭ア内大臣ニ三條石大臣延喜の聖代ニシテ
アリキニシテハムニ小十九代又十一代義
宗トヨシムトハムニ小十代又十一代義
宗トヨシムトハムニ小十代又十一代義
宗トヨシムトハムニ小十代又十一代義
宗トヨシムトハムニ小十代又十一代義

りたりりきて累家乃儘名をうみもんことゆ
キかふる一太叔清感い然聳聳詔をとけすま
て切目ひ高よりもせのがふうりう和象紀伊國
伊賀併勢ひ衆人おまらうけて大勢すてめうり
伝れにうかどりふ所内つて者りくもくうりし
平家のたせひをうせてせめんゆ付時刻ねや
めうすくきりう又火をとばしきえも君もい
うてう安穩よ凌りせ竹あづき原橋北地となり
たらんや君をうえ不自給ひ」ともあうひ天下
乃珍事。至るれ候せじうさうありへし右
邊の壁を所造小大小事」をやあくまうとこそ
穿心きあひうまく隣をえかくひ玉神門
タカくれりますやうよ黒糸せうふへうさて
主上をいはだに木まくまだうこうとのはふ
上宣い一品清書所下内行取やうんめいとん
等次第ノトナリ又ね飼ひ方小人押とのノ様取れ宣
ノト人かけのあけうき小者そと立へもうれよ
き右邊門壁すこ彼へ其方さぬひお房うどそ
うけうひらんとやまとをきまほ先教ゆきくも

あへモ世乃中を今へつゝこさんされ主上の口
たゞせ終ふへきぬ餉みけ信れ。臣君とく黒戸北
山兩ようほく年せたなり末代なれどもさへ
ク日月をいります地よ落語もわねを天照太神の
八幡えを主はとけり。つまり行ひわくう果
圓ゆけか振のたまし。ととり色とぞ我御みん
いまとくのときの先駆をまかし。前代未嘗
の不運後がよとてのろくあけよる。御の不
色みくともき跡へい怪奇を人もやまくらむを
ち小毛さすけゆく。またれも且もうみ
しひてまれりうら高業アリ。とてうつせよ
もまれあひうきとをのみまくも首の汗
虫よのく跡よもと比内裏あり。とあをきたん
まへ耳をも聞や。とわいぬをくとゆきとて
と乃至ぬかうて志がふくうりうれきり伝教
乃度上アリ。差せられし時をさてもゆく。と
忍く行ひ。一。君の件事。浅かりひてうりし
がきてそあ落ひき。うる。憲御ひ。許空ハ局空
の事。代きてたか。小。あ。落。ト。い。ど。ひ。却。ふ
りゆく。ト。あ。。と。き。う。だ。り。と。み。と
して。憲御。空。ハ。ゆ。う。ま。を。見。を。う。活。く。耳。目。

よもやらひぬ魚人ありひづふそととぞりう
たとくも帝堯天子のくす井ノ水リ まほこ
と七十年後トモトモ小老て誰より天下とゆ
けるをまよて嘗てを清たれすりきんふたは
みをもつてして皇子さひものなり まほ丹
朱よりとばらあめぬもとゆせき堯の盡もく
天下をゆき一人れ天下不ア あらえなふ哉りて
太子され、おとせ地獄小さけけての民をくわ
す、じへま、丹朱とすりて九人の皇子ひとと
としてを対にたゞひよてわまほを嘗人をふろ
詠行ふよ箕山の中 小许也と云志方をおきりて
くられぬだりとすくノ如クて勑紋取めて涉佐
をゆげりへきよーと後られたりきつア 許由
はるよ勑旨をたぶやさす割箇度を景のことを
きりてげりきだりとて額河乃水まで耳をあ
ふれり 因山中ト小石せざる巢穴とひよ嘗人
牛をひりてけりトアリあらわとひまんトアキル
ク耳次わうよとみてゆ人をとふア其趣外か
うる巢穴りいちく嘗人乃世残遁あくハ因生本
乃あくとソクテは木い源き若けり きぬに
うちきをあくもろもろ上よりを便ゆ
まほ太家乃渠みもゆきらねユヒめきをもろ

ふりうるんちせとのりまんとをもなくなれ
深山ノトあうこもろへきふるじと半よりて揚ヨ
ナリモ側うるとも渴て刃もぬふりけられナリ
ナリあうきスレアモカシナビテモアリスレ
カキナリケラリ信教ツハ小うてふわり大は
冠小あく見えりてひそア天子の御ねりま
ヒ乃レシムナリ大御清盛ハまろいナリの御日
ヨリモのくもを人枝代りてヨロヒハ神ヨ
アリテ六波羅ヘソルアリキナ内小はさうと
めて今朝やよせんすらんとてアヨクのをくえ
めくまうわくひあくれるふく食後モルノ
たみ閑向太政大臣伊東太臣伴通己下名奉
内し行へ里毛ハカ助入乃ハ子恩僧俗十二
人乃尼寺のしく定めアキモナタアリ万大臣
内城アリテ至流アリ奴セアシ教俗ハ佐记至勅め
られ僧も度孤残取え邊俗セアセラアモナ新寧
貞憲院波瀬義法アハ長寧河波國信濃守信憲ハ
安房国波瀬義法アハ丹波国波瀬寬敏ハ上総國太
波瀬勝憲名安藝國波瀬沈憲ハ信濃國憲耀名陰奥少
筆恩い伴縁組の遍々越後主アモアメラレモ

の後憲は鳥羽院より春生を苑中とりよ勅歌
と稱て懇情獨酌嘗十奉風高上林苑國成貯ん霧
とかくきづるを江又妙よして流季よ是をばと
へきり沈憲の説はふは龍神も感うまふ甘病
のあとすしめ遍乃若挽くをいのりし夏
のまくみへ寶蓮苑うきてうくふありすく
えれ一門下じす不ぐあく人へわやのゆ
アレいづらまてえを人アトまえだり同廿三日
太内の先とも六波羅よりよふらとてこもれり
まともその儀もゆ熱して十日より日來
不六つゆ内裏よりますりてひりゆき
太内少い六波羅よりよふらとて兵士も右津方
准よもせらひ源平あ家乃軍兵ホ京向河ア
は還もくもとまくふされうんとまれども歴來
年始からぬくなみよも及まく合戦乃評定
もくりかりサ六月八日敵あけて益人右か弁威射
一品唐書兩へ来て君ハリムに射めされ以世
るをと來れあけぬまアミカムへきよてひ
經家性方をやいゆくむ孫々はりやや引率も化
ふへきとせひぬゑきりつりこへえ活をあ
せたりさせとそりせられと上曾御どろ
クせめひて仁和の方へこそたやくりう

めにて及上人乃ての小説寫をやつてせ活ひて
まよきおさせたり すれどあ門の筋まで小壁
のかくをかう おうすを経ひてうれもを渉るよ
がれされば徳ま乃へねむ者一人をされも渉るよ
りまうせて妨害うるい まく來事の事 され
き外はの月もさう かも小山たうひをとだえ
てえりさくやり ゆう事なり い業のうちも忍べ
ゆうす本草の風ノリ そらく とくとも ても
運流れおひある とくに騰代きやせ おきく板
しと一とせ贋故院のぬき山不れ業うりきる
事 まとも抑不なし 無くことせ活えられそれ
き敗軍なれどもお義弘光弘以下 ふらひくゝの
りくうたか一鶴 きく おまきおまかへ きく
士一人もひもひもひはあああをそそこ乃わまうり
一首もよし うに用ひて にくげきく
かけさみほりうきつもみのそくじうしぎよ
きりておぞめりひちよふきもくくく合
らるるまへくるにまく不 ほん中ふやうく
乃ひ死をそとてさせらひまくせ ほく死月
吉弘へれ章よりだりしも甚しき乃ほ立れど
そきこもしとくして仁和もア えうせ
燕山はす おれり ふは序 うろひあてゆ

志はらひれあらせて往け渡すこめあとつひ
くくしをりてきまほせゆひけり保えふ宗法
院れりせひしとは寛遍は務る坊より川
ト一余りせてさぬてへは志とよつりき累述院
と鳥羽第一乃古みびよ宣ハ才四清室ハ才五乃
主にてれりまじねいつきを用へ兄の没こ
とされどとこもうりいつきゆをよすひしき
そろ乃はつくかもうからせ路もわ防うんの程
あうめてたゞれと人皆ヤキラヒトウや主上い小
内らんアリ清車をとくめ房のそりとめて清
うらをきく同く行たゞり地とくを没トモ
ひとて内は不乃行トモ被ふ大ゆらまそり
だりきを纏ゆ良おややちあをてとくめま
らセキラと伏見源中納言仲伸シナム小内合せコハセ坊
門の房の高所をうづけまりまく中まも主上
とひと川車ゆそめされまく別當怪ハタチ大納言
経宗な浅トト小柏もそみてて候京し藻壁門
より御車而一まきとしげの金子平山ヒラヤマにめた
うちれおうせゆより怪ハタチあううみの子ゆ
乃りにとぞなれまく金子うけあやゑしてゆく

れも二象院涉左佐の始めより十七日より
珍ふうへ詔教りとくりうちくもたり
よもえやうすり浅衣ハ多幸れなり襷アリとめ
もまよふもくり乃女房小刀もそせ珍ふ中ま
たリ一あはいうてうかんとくめをもむひぬすくと
キ一よのせきり清盛の良等伊友氏志家源
家御れ股巻のう人ヨ小法モテ難色フヨウ
飯玉扇貞康もろ革の後まさのう人ア牛飼の
毛やうそくして内くらみ然仕ふ上糸つと
毛くらみつこじりかどし、あま左佐門ととく
もくよ行ますア内裏の佐吉感ニけ守れ盛孝
陸守定盛三百多騎まで左佐門東洞院ヨ祐
あり清車ノ前後伏守護して六波羅へと、これ
ありされことあるく行ますりてきまほ平家入
くひまかうらあよと限りヨヤウて差人右
が开城れをりて六波羅を宣居とあられだりの
款アシシと思もんまきうきもせ衆也とま
臣内大臣己下云々など人わきもくとまき
きり内裏へとあらあよてソセぬりと兵せば
ナリと見てヨモヤに小とりときありされ
ナリノ内苑少庄のうちじうも

くせきうちのうら下アシを薦の下アシより上アシ
先あひまアシもて玄龜アシハシムヨ河原おりてま
うらアシなり情感アシをみて家門アシの繩昌弘勢
乃面因アシと「うろ」アシひ持アシへ先教アシを受アシふももも
モリアシその沉醉アシみれもうらアシたりを與アシひだら
あくアシひよアシて女アシをとアシあくうて」
こますきとて群アシひげつ小盛アシは中持成親アシセ
目アシあけりめアシモトアリアシ小角アシていれ
もすうそ珍アシい地アシ石アシへ入りいぬアシとアシありとも
ゆう鄉アシねむ者アシ一人アシもいそきうりびアシとアシアシ
運アシひきをめアシとあう切アシえアシとアシ行アシられされ
ハ伝教アシよもこアシあアシ「アシ伏證家性アシ方アシりアシ
やあくめたれもとアシへも其人アシどこのもアシうアシい
とアシそぞらアシとアシうきえアシれを書きアシふアシ書アシ
不アシへ衆アシうれアシなれせアシ上宣アシもナリアシまさにまアシ
キ曉アシまで清アシもあひアシありけら物アシをとアシへとアシ
ナリアシままた上宣アシか乃時アシ小面アシれは平吉アシあつ
ウセ経アシひまうく清アシまほひをたゞりんアシときアシとアシ時アシ
ほちんあよアシ三度アシれりえアシこそアシとアシきくきりうアシ
うきあうりせアシ泰教アシカとの下薦アシりいアシてアシ

活潑不急を教ふべきとす。丁寧う黒戸の所へ
就られたりとども主上もまたらせぬよもを
うて、トモリ色里け半披露半詰そと中る
乃みトリトモく重き薄ふう裏うるうてお齒を
うちすらすもゆく新大歎きもおもせ承れば
志走り行ぬれ小たりこそ大刀男乃よと
里せめうろきいりうひしりて木よりあら
里く疊巣びきされこそ板岩のえひくまで
たよりあせることもゆ。かあ怪方いえ東信朝
ゆくよとみて鞍劔ゆきりうそと一日
食え方湯門聲乃誅言筋にて思ひれされ
ハか括子主上とねすみりうとあくせうれけ
里は人を生得せひちいこくたりこれも小お
あうう人中やうそれノハ伝れよとくして院
内を押着せう中蝶せうきげまれ時の人に中小別當と
そしひきつたまちた臣。併あひいあの中々中
蝶ひゆすう中蝶せうきげまれ時の人に中小別當と
そしひきつたまちた臣。併あひいあの中々中
蝶ひゆすう中蝶せうきげまれ時の人に中小別當と
そしひきつたまちた臣。併あひいあの中々中

うて初章ハ六ノノヘ丙章セ仁和モヘと承里ヒ
モリム小トドモミタキタレモトマニシテソル
「トキツモトモ右邊門禁乃方よりもいま
所せばアモセナセナリテノ源氏ノアシム
カモリヤウツキニコモロ勢をアリセヤム内
裏ノ物をそゑふされけ給大内軍少佐義太邊門
管伝教又良新内臣伝親信教の舍兄弟勤撫大浦
基教民部撫が浦基御抑ヒテの尾張かね伝後
其外伏見源中助ヒ御仲誠役中將成親治アマ益
通傳織前司伝免壹岐守貞知但馬守多兵庫駿
教政布書本司光泰伴實也光基河内守李寔子直
吉忠の封李盛一门少佐マツカニ頭翁御端子繩
愈也源太義平次男中主大史系也長三男右兵衛
佐於義也の伯父院奥六郎景隆義也乃たと
ト新丈吉景盛子也佑波砂野大史宣成平賀
四郎景也少少人姪田若清政清及若兵房吉基
伊木本源三秀景也大主守也官ハ家朝小也小
舅なれどもう男そのうら承也家子扁等也
のうじ三河國住人小笠原兵房义子ね摸國小
ハ波み以高景也某也良景沈山内須敷刑ア耐後
其又乃既日後深茂益聞也長升承友お為宣
盛景也太忠沈猪儀小平六範驟然后以良景

室平山武者所未室金五十室家也是立右る先を
元上総外八郡弘常豈隠閑少い園以爲時負上殿
閑ゆほ大胡大む大數を肩伝禮閑ふ乃行相小八
良太史京主本省中左派中太嘗盤井持族戸以官
卑斐閑よハ升得四名伝家と始めとてむ称と
北共二百人あり亦ソム軍共ニ子姫彌トソ志
アキミキリナリノハ友軍よ正うときとモタレ
イ人、物具セヨキタリ通石傳門傳信教セ赤地
ヲキナリタレフノ驚モアモの體アノ薦の
被宣ねカラウアニコソヒテクシテモタレ
白星の罪アリくもかとお、んをルルヒアリキ
御一震震多の敵アリ虎を伏ケテモ看候ひ
キリ生年廿七太に男ハウメヨリ羨慕アガ
奥多喜竹ひだりそのああしてちう将どとも
まれる約ヤとそ忍、なりキリヨリ奥列の墓廟
ウハア一丸もして極差一ノキリ休院へ氣々せ
キリナリシロキリいづれ地乃キシムシル地
シヒノ方附の様比ホリリとア東ノハ小引
えてハ至越後中の成親ヘテんらのアキナヒモソツヌ
ヌアノモエキシカヒのアロヒキナヒモソツヌ

そゑひふらう足先うらさ小向休福乃端とひて
伝教ゆのる乃あよ同ノトラ小引えたり感就
今年サ四歳嘗儀シトクノ人に多くきそく見
えられけふ兵士の大將左も頭翁ぬい赤地の小
しきひりとなれよくろ余御ノのよろひり
歎シトカソロ立教軍ノをくあめり物にくら
のうちをもき黒羽の兵員ノミキハヤシリテ
黒鷹毛うりるトトくろうをうせて日乾門よ
う引たてゝろトトサ七服トツナドトトる
自縛の人少佐からだり嫡子源太義平を生
年十九歳絶りいろ乃急遽の立翁アハ被とて
胸板よ鷲をハつゝてはげゝる還とこそたゞモ
犯れよとの筋を志翁石さ里とゆふたらをも
き石せん矢をひま友のらりて麻毛すりるのみ
らうりのとふ小鏡トトおうせて又ノムと同ノ
歲くち繫乃立翁ア人をもたゞしてはをとあふ
志たる室代の體小由里北軍をきうすみうりと
つる矢脛不發北らりてあーりうるふある
度ぬに鷲おひて見乃るにひうへてしと立だり
されニ男大老傍彷徨ハ十三うんばひだり

ノリ源太ク産夜とリふくろひもき白墨の甲の
絃を志め聲切とりふにち至モ元十二キテ
そめ羽乃矢おひ室友のゆこりて粟もうくるよ
柏みくけ、モリ、うる、織ひてあまきも一筋ス
ひてぢりは産夜聲切、源比内室代ハ良具内
中小」と不極差ハミ賣うりハ惣教の本と云
ふを源太と云やけう二歳の時により多くせよ
雲見せんと仍然ニテゆり聲ひてわきとくろひ
とれよ、神よすへてそきんせんよへられまく
きてこそ源太ク産夜と云はれられ胸板小
天照大神正八幡大菩薩と云ひて多くせらるの
うてゆす若のとふ北喰かくりたふさぬ体御
せらるうりさて聲切と下いハ惣教貞信家但をせ
められしき度、よけとうえ十人のくひ
とくらアミヒケモナ、ミキミキヌヒケ
まりとく若けだり奥列の位人又寄と以ふ能
活々化うり者より嫡の不れね侍せうけは源源
太あうけ入竹よつま、三男されとも報報
もつうり活ひきくいけるよ源氏代太也と云り
落ふるまちしときり先傳佐文氣翁のゆくを
見こもて平家やもやりひのひもく人ふく記
残せまんむりもうおりへとせひもんとや

それまくはもうさん小さきこゝとし風凰を卯
ノ中よしにて趙氏乃りをやひわり諸の子ひり
いざとつるをともよくあとあすととかやう
の事トおやアつきはキ年治元年十二月廿七日
前乃刻もぞりハニとすりトヒ自乃寄モミ
おう直上をたすとくわくしもくうへトアキ
日乃ひうち映徹して具ハクふぬゆをきわ
だりてしに侵小そゑひだりきんをよそその
ヒトウ天竺震旦ハそえもす日が森ねア
ヒヒテハ數ねハ一數ふあさふへき武士とあう
ハトシモ刀もさききりあうれよ教政光泰光基
もあくろうモリトして忍くされも莫ねうこも
やとをもれされと大幸ノのゆ人々小事
てきア門主にくかべーなれハ耶りひとくま
里所のうり義綱立ひきうちと度の合歎りう
ちまけとは东幽へもせうゝ里八ヶ郷の家人代
り平成のいちふひとやうりうと人いみま
保元アスルノぐく乃たとアセヒヤウモのこ
あらじよまくちくれいひ故もほし人まき
をあらじよまくちくれいひ故もほし人まき

さきけのうそも六りうすい 納業下りぬとや
しのちをね歎とすりさん事 外かうりひて
ちる背みるめくらからせうきまくうりこ
きもよりまさるのきふくはものうちありよ
里ゆうもとてうけりそきるアリトモ名に
い源名庫頭とよりまうう云ひよく併勢平
氏アリつきゆみそのうみ活魯んうゆとくろよ
うああ家のゆえ矢アリきつはきわらじとくら
キタケとひしけうれし西事アリ累代
ゆケ多けハとくよりと十番ルキルア
付多々活魯のゆよりとくより目半一乃ふく
仁アリ同きしてあやまつをゆくためねーそ襷
ノア衣のむ厚あれとトされきわうり

元代蒙古文

元代蒙古文

元代蒙古文

元代蒙古文

